
挑戦

滝龍太郎

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

挑戦

【Nコード】

N9312I

【作者名】

滝龍太郎

【あらすじ】

人を殺したと警察に連絡が入った。

警察は指図された現場に行ったが、二度も空振りさせられた。

三度目も空振りかと思われたが、羽田は羽田であったが、空港ではなく羽田駅で死体が発見された。

警察をあざけ笑う犯人の意図とは……。

「宮部警部は居るかね」

「お待ち下さい」

警視庁捜査一課の宮部は、薄くなって来た頭をトントンと叩きながら部下の石倉と雑談をしていた。

「警部、電話です」

前川刑事が告げた。

宮部は相変わらず頭をトントンと叩きながら、受話器を持った。

「宮部です」

一呼吸、間があつた。

「人を殺した」

「何！」

宮部の声で、石倉と前川が顔を向けた。

「だれだ！」

宮部が怒鳴った。

「そう大きな声を出しなさんな」

相手は低い落ち着いた声で言った。

「サンシャイン地下駐車場。後は探してくれ」

「ちょっと待ってくれ」

宮部が言ったが、電話は切れた。

「警部何か」

石倉が怪訝な顔で聞いて来た。

「サンシャイン地下駐車場で人を殺したと言ったんだ」

「本人からですか？」

「ああ。良く分かんが、とにかく行ってみよう」

宮部は石倉と前川を伴って、サンシャインへ向かった。

「なぜ警部を知っているんですかね？」

車の中で前川が聞いて来た。

「分らん。それほど有名ではないと思うのだが」

宮部は思案してみた。

車はサンシャインの地下駐車場に入り、係員に不審な車がないか聞いた。

不審なといっても、自動発券で自動清算では不審者が居たとしても、容易に分かるものではない。

三人は、それぞれ一台ずつ停まっている車の中を覗き込む事にした。いたずらかも知れないが、宮部警部を名指しでかけて来た以上、やらざるを得なかった。

薄暗い駐車場の中で、スモークを貼ってある車などは中が見えにくく、フロントに回って確認したりしながら端から端まで隈なく搜した。結果、死体及び不審らしい車も発見出来なかった。

「どうやら試されたのかも知れんな」

宮部が呟いた。

「そのようですね。きっとどこかで我々を見ているに違いない……。いまいまいしい奴め」

石倉がそう言って、辺りをキョロキョロした。

「でも、その目的は何でしょうか？」

前川は気になった。

「事件を起こす前の挑戦かも知れんな」

宮部は犯罪者の心理を考えた。

「我々の動きを見て面白がっているだけとは違いますか？」

「うむ。それならいいのだが……」

宮部は、不吉な予感が当たらなければ良いのだかと考えていた。

「宮部だが」

その電話は、又かかって来た。

「先日は申し訳ない事をした」

例の低い落ち着いた声である。

「サンシャインを隈なく捜してくれて、ごくらうさん」

宮部に労をねぎらった。

「お前はだれだ！ 何が目的だ？」

「別に何の目的もない。ただ人を殺した事を教えようとしているだけだ」

「何でだ？」

「そんな事はどうでもいいだろう。それより、今度は大井競馬場だ。しつかりがんばってくれよ」

そう言つて、電話は切れた。

「また奴からだ」

「今度は何て言つて来たんですか？」

石倉が聞いた。

「今度は大井競馬場と言つて来た」

「愉快犯じゃないですかね」

「何とも言えぬ。ところで大井は今開催しているのかね？」

「ええ、今朝ラジオで宣伝していました」

宮部はちよつと考えて、

「よし、君たちは大井競馬場に行つてトイレとか建物の中を当たってくれ。俺は奴の声を鑑定しにもらつて来る」

と言つて、宮部が席を立った。

宮部は自分の名前を名指しされた事に、必ずどこかで接触のあった人物と確信している。声紋鑑定でその人間性や、年齢、職業などがある程度分かるのである。

仕事柄、憎んでいる人は数多い。刑務所に入れた人物、その家族、親戚、友人。数えたらきりが無い。とにかく、犯人の目的を掴む事が解決の糸口になる。

石倉と前川は、競馬場の全てのトイレ、建物の中、椅子席で寝ている人物、はたまた芝生で寝転がっている人物まで調べた。しかし、これといった不審者は発見されなかった。

「そうか。一応皆帰った後もう一度当たってみてくれ」

宮部は、無駄かも知れないが気になるので、石倉に言った。

大井競馬場はシテイ競馬という事でナイターでやる事が多いが、今日は昼間だけの開催であった。

3

結局、今回も取り越し苦労で終わった。事実その方が良いのだが。宮部がテープを回しながら声紋鑑定の結果を石倉と前川に説明した。テープからは例の落ち着いた低い声が流れて来た。

「鑑定の結果では、歳は四十から五十くらい。やや小太りで、下顎が発達していて角ばった顔らしい。職業は肉体労働ではなく、声を張り上げる仕事でもないという事だ」

「では一般的なサラリーマン」

「そうだな、中間管理職だな」

宮部は自分と比較してみた。

「ちょうど俺みたいな感じだな」

「そつえば声が似ていますね」

石倉がそう言うのと、

「警部に似ている人物を探せばいいんですね」

と、前川がおちゃらけて言った。

「そついう事だ」

宮部がすまして言った。その時、また例の人物から電話がかかって来た。

「宮部です」

「またまた申し訳ない事をした」

例の低い落ち着いた声で、淡々とした声で喋っている。

宮部は黙って聞いていた。

受話器の向こうからクラシック音楽が微かに聞こえて来た。

「もうゲームはやめよう。あんたも疲れただろうからな」

「どういう事なんだ！」

宮部が怒鳴った。

「そうカリカリしなさんな。あんたの人間性を見たかっただけだ」

「どうしてそれが分かるんだ。我々が行かなかったかも知れないじゃないか」

「いや、あんたたちの行動は全て分かっている」
自信たっぷりの言い方である。

「ほほう。凄いもんだな」

「そんな事より、もう一度探して貰いたいのだが」

「またか？ 一体目的は何なんだ」

「あんたに事件の解決をして貰いたいだけだ」

「俺に挑戦ってわけだな」

「その通り。今度の獲物は羽田だ。じゃ、がんばってくれ」

と言つて、電話は切れた。

「チッ」

宮部が舌打ちした。

テープを戻して、今の会話を石倉と前川に聞かせた。

「どういふつもりなんでしょうね」

「分かん」

「今度もゲームですかね」

「いや、今度は違うと思う。前の二つについては自分でもゲームと言っているし、今度は明らかに私に挑戦して来たのだと思う」

宮部は、羽田に事件が起こると詠んでいる。

「よし、空港警察に応援して貰い、やってみよう」

宮部は乗ってみる事にした。

羽田は相変わらず混んでいた。

石倉と前川は、空港警察の人と一緒にロビーからトイレの中まで不審な人物が居ないか、何か変わった事がないか目を皿にして動き回った。

宮部は送迎デッキに上り、辺りを鋭い目で追っている。

このいたずらとも取れる電話にほん弄されてしまっているが、今度は確信を持って、空港警察まで動員して捜査に当たっているのである。

現在のところ何の異変も見つかっていない。

宮部はデッキからロビーに行き一息ついた。ロビーの大型テレビにはワイドショーみたいなものをやっており、芸能人の噂話などを興味本位に報じていた。その時、アナウンサーに脇のスタッフが、何やら書いた紙を渡した。『今入りましたニュースをお届けします。東京モノレール羽田駅のトイレに、男の死体が発見されました』
「なに！」

宮部はあわてて腰を上げ空港警察に走った。羽田と言うもんだからてつきり羽田空港かと思っていたが、羽田駅の方であった。

署に着くと、空港警察にもその一報が入っていて、てんやわんやであった。

宮部は石倉と前川を呼び、すぐに羽田駅へ向かった。

「迂闊だった」

宮部がパトカーの中で呟いた。

「羽田と言われれば空港としか頭にないですからね」

石倉が警部の肩をもった。

「そうですよ」

前川もやり場がなさそうに言った。

話している内に、パトカーは羽田駅に着いた。羽田駅の東端にあるトイレの中で、座るような格好で男性が殺されていたという。大勢の鑑識が辺りを忙しそうに動いていた。

宮部が所轄の刑事に様子を聞いた。それによると、被害者は頭を鈍器のような物で殴られており、頭蓋骨が陥没していた。死因はそれらしい。身元は持っていた免許証と名刺から、大手広告代理店に勤務する矢沢良一と判明した。第一発見者は、トイレに入ろうとしたところ一番奥の扉が半開きになっているのを見て、発見したらしい。時間は午前十時半頃であつた。

「殺されてまだ間もない様子でしたか？」

宮部は今朝殺されたのではないかと思つた。

「そんな感じでしたな。発見されたのが十時半頃で、私は四十分には現場に着いたのですが、被害者は殺されたばかりの感じがしました」

「不審な人物は？」

「いまのところまだ」

宮部が、所轄の矢口刑事に事のいきさつを話した。

5

宮部警部は、石倉刑事と前川刑事を伴つて、羽田駅殺人事件の捜査に加わつた。

被害者矢沢良一の死因は、頭蓋骨陥没による脳挫傷で、死亡推定時刻は四日午前八時から十時の間である。

早速、目撃者探しと矢沢良一の交友関係及び親戚筋を洗う事にした。

宮部は犯人の挑戦を真つ向から受け止め、記者会見で犯人にメッセージを送つた。テレビカメラを正面に見て、部長の石原と同席した宮部は、部長の一通りの説明が終わつた後、目を見据えて喋つた。「犯人に告ぐ。警察に対する挑戦かも知れないが、何のかかわりのない人を殺して心が痛まないのか？ そんな事をせず、挑戦するのなら私に直接挑んでみたらどうだ？ それが出来ないようだったらこんな事はやめる事だな。言いたい事があつたらいつでも聞いてやる。私の名前は宮部だ……。では」

宮部はわざと何のかかわりのない人と、喋った。この言葉で犯人がどう出て来るか楽しみである。

「犯人から何か言つて来たのですか？」

記者から質問があつた。

「いや、何もない」

「挑戦と言つ言葉が出ましたか？」

「犯人は皆警察に挑戦しているのです。逃げ延びられるか、私共が捕まえるか、その挑戦です」

犯人はこの記者会見を見てどう反応するか。宮部のメッセージは届いたはずである。宮部の行動を把握しているわけだから。直接と言つた以上、犯人はプライドが高いはずであるから、必ず宮部に何かしてくるはずである。皆の心配をよそに宮部は涼しい顔で、

「心配すんな」

と言つて記者会見場を後にした。

被害者、矢沢良一のその日の足取りや交友関係等からは、何の不審事も見つからなかった。仕事にも私生活にも真面目で、人に恨まれる事は小指の先っぽにもない人物であつた。

「無差別殺人ですかね？」

石倉が宮部に聞いた。

「そのようだな」

宮部は、自分への挑戦をこんな形でやつて来る犯人を許せなかった。

目撃情報もまだ出て来ない。聞き込みも功を奏していない。第二の犯行の前になんとか捕まえなくては。

宮部は次に来るのを自分に来てほしいと願っている。危険ではあるが、それによって第三者は救われるし、犯人の手掛かりが掴めるので宮部は敢えてそうしたのである。

「警部の警護をしなくてもいいのですか？」

前川が心配そうに聞いて来た。

「刑事に警護なんて前代未聞だろう。俺はそんなやわじゃない。心配すんな」

「でも相手はしたたかな奴ですよ。まして、無差別となると何をしでかすか分からないです」

「ああ、分かっている。大丈夫だ。絶対に捕まえてみせる」

宮部は過去にも何度か狙われた事がある。この仕事をしていると、二度や三度狙われてもしかたがない。しかし、今度は自分の方から俺を狙えと言っているの、その辺が前のはちよつと様子が違った。

宮部は用心するに越した事はないと思った。

7

宮部に対する犯人からの襲撃は、五日経った今も何もなかった。宮部の思惑は見事に外れた。

一方、前川は羽田駅で殺された矢沢良一と犯人との間に、何か接点がないかと必死に嗅ぎ回っていた。

「警部」

石倉が今朝の新聞を見ながら言った。

「この尋ね人の欄なんですが・・・」

刑事の職業柄、尋ね人の欄は欠かさず見ている。

石倉は新聞に指を差して宮部に渡した。

『良一、待っていてくれ。 矢沢』

新聞にはこう書かれていた。

「警部、これは矢沢の家族が犯人に対するメッセージじゃないですか？」

宮部は新聞を手に取り、じっと見つめた。

「そうとも取れるな。これはいろんな意味を含んで載せたのかも知

れんな」

「と言いますと」

「矢沢良一の奥さんか、親戚の者かも知れんが……。一つには君の言う通り犯人に対するメッセージで、挑戦状かも」

「挑戦状？」

「そう。私がテレビで挑戦を受けると発表してから五日経ったのに、何も起こらないので自分たち自ら犯人に挑戦状を出したわけだ」

「苛立ちがそうさせたのでしょうか？」

「ああ。それと天国に居る良一に、犯人は我々が捕まえるからもうしばらく待っていてくれと、良一にメッセージを送った」

「まさか」

「いや、自分たちへの慰めもあるかも知れん」

「どっちにしる、我々警察だけに任せておけないという事ですね」

「その通りだ」

宮部が険しい顔をした。

「石倉君、新聞社へ行ってこの記事の送り主に会って来てくれ。あらかたの真相が分かると思う」

宮部は、犯人がなぜ自分に何もして来ないのか、苛立って来た。

8

石倉は、新聞社から聞いた住所の家に向かった。発信人は矢沢良一の母親であった。

「ごめんください」

石倉は矢沢良一の実家のインターホンを押した。警察の者だと言うと、なかなか開けて貰えなかった。警察に対してかなりの不審を持っているようである。

七十過ぎのその母親は、憔悴しきった顔で石倉を見た。

「私は警察など信用してないから。そうでしょあんな大勢の人が出入りする所で息子が殺されるなんて、考えられないのよ」

母親は険しい顔で石倉に言った。横で父親がまあまあと優しくなだめた。父親は警察に文句を言ってもしょうがないと、石倉に謝っている。

「一人息子なのよ。一体……警察は何をやっているの」

母親が強い口調で言った。

「お気持は良く分かります。警察としても捜査を強化してやっておりますので……、ただ今回のような、犯人の気持を荒立てる事は控えて貰いたいのです」

石倉がそう言うと、

「何ならすぐに犯人を捕まえてよ」

と、母親は更に強く言った。

「それは我々としてもそうしたいのです」

石倉が父親の顔を見た。

「よりによって無差別に、何も一人息子を殺す事はないのに……」

父親はぶつぶつと、諦めの顔で呟いている。

「犯人はただ単に警察に挑戦しているって聞きましたが、それは本当なんですか？」

不意に石倉の後ろから声がした。

「あなたは？」

「妹です。この人の妹です」

母親に指さし、自分を名乗った。

「心配で、ずーっと泊まっているんです。姉夫婦にとっては一人息子ですからね。妹のなっちゃんはお嫁に行った人ですし。息子とは違うから」

母親の妹はそう言うと、母親の顔をチラッと見た。

奥の方で子供の騒ぐ声がした。良一の妹夫婦が来ているのだなと思った。

「良ちゃんとは何も関係ないんでしょう？」

「今のところは」

石倉は返事に困った。

「警察に恨みがあるなら警察に復讐すればいいのよ。あんたのこの警部さんがテレビで犯人に言っただんでしょ」

「ええ」

「なのに何にもないなんて、また関係ない人を殺すんだわ」

「・・・」

石倉は何も言えなかった。

「だから私たちが仇を取ってやろうと思って、私が依頼したのよ」
妹がきつい顔をして言った。

「お気持は良く分かりますが、先ほども言いましたように、犯人の気持を逆なでしてほしくないのです。今度はあなたたちを狙うかも知れないですから」

「ええ、構わないわ」

妹はケロツと言った。

「それは困るんです」

「なぜですか！」

母親が大声を出して石倉を睨んだ。

「危険です」

「そんなの百も承知よ。このままでは良一が浮かばれないわ」

母親は涙を流した。

ただの無差別として良一が殺されたのであれば、親としてこの上もない悔しさである。しかも、警察に挑戦する形で殺されたとなれば、余計腹も立ってくる。

それから二日後、意外な目撃情報が寄せられた。
矢沢良一らしい人物が男子トイレの大使用に入ったのを見た人がいた。自分が小用を足している時に、大きな旅行バッグを持って入って来た人物がいて、そのバッグがトイレの中になかなか収まらない

くて、そのバッグを押し込めていた人物ではないかと、警察に連絡して来た。

「そのバッグはかなり大きかったのですね」

前川刑事が聞いた。

「ええ。私は用を足していたのですが、後ろでぎゅうぎゅう音がして、振り返ったら旅行用の大きなバッグを一生懸命トイレの中に入れているんですね。ところが入口に引っ掛かり四苦八苦しているんです」

「トイレの入口に？」

「ええ」

「それはよっぽど大きなバッグだな」

石倉刑事が言った。

「そうなんです。普通大きなバッグでも、トイレの中に入らないほどのバッグは持って歩かないですよ。ところが私も初めて見る大きなバッグで驚きました」

「そして？」

前川が先を促した。

「その人は中から引っ張っていたんですが、それを諦め一旦外に出て、今度はバッグを押して何とか中に入れました。その時、目が合っただけを覚えていました。その顔が新聞に載っていたのでびっくりして連絡したのです」

「随分経ってからですね」

前川が聞いた。

「ええ。あの日は羽田から長崎に出張がありまして、なんだかねだと忙しくて新聞を見ていませんでした。そして、出張から帰って来て家に溜まっている新聞を一通り見て分かったのです」

「そうですか。ところでそのバッグはどんな物でしたか？」

「茶色の革製みたいでした」

「大きく膨らんで？」

「そうです。これから旅行に行くか、帰って来たところみたいでし

た」

「羽田だからな。その人は一人で？」

「ええ。私の見たところ一人だと思います。でもたとえ連れが居てもトイレの個室に入るのは一人ですよ」

「そりゃそうだ」

石倉が苦笑した。

「でも相棒が居れば、何もそんな大きなバッグを持ってトイレに入るわけではないでしょう」

前川が言った。

「その通りです。私もその時だれか居れば見ていて貰えばいいのにと思いましたから」

「時間は何時ごろでしたか？」

「羽田発十一時の飛行機に乗る予定でしたから、確か十時ごろだと思います。後一時間あるなと思っていましたので」

「他に何か感じた事はありませんか？」

「後は何も。ただ大きなバッグというのが印象にありまして」

「そうですか」

目撃者には一旦帰ってもらった。

「バッグはどうしたんでしょうね？」

前川が当然のように聞いて来た。

「現場にはバッグはなかったが」

「犯人が持つて行った。それとも知らぬ第三者が持つて行った」

「いや、死んでいる人間から物を持つて行く事はしないだろう。たとえそれが高価な物であっても。人間であれば……」

石倉は矢沢良一の母親の顔を思い出した。

そして良一の女房、道子に電話した。

「ご主人はあの時、どちらかに旅行でも？」

「いえ、そんな事はありません」

意外な返答だった。

「じゃ、何か大きなバッグを持つて家を出ましたか？」

「いいえ。普通に仕事のカバンを持って行きましたけど」

「そうですか」

「何か？」

奥さんが尋ねた。

「実は、ご主人が殺された直前、ご主人を見たという人が現れまして、ご主人は大きなバッグを持っていたと言うのです。何か心当たりはありませんか？」

「何も。何もないです。主人は広告関係の仕事ですから……私には分かりません」

矢沢良一は羽田にある広告代理店に勤めており、その日は八時半に出社し、お得意さんを回るので九時半に会社を出ている。

会社からこの羽田駅まで歩いて五分。そして、トイレに入ったのが十時頃。死亡推定時刻は八時から十時。という事は、大きなバッグを抱えてトイレに入って間もなくして殺されたに違いない。そして、大きなバッグが紛失している。

トイレに入ったのが十時頃。九時半に会社を出て五分で駅に着く。ここで二十五分の空白がある。その二十五分をどこでどう使ったのか。その大きなバッグを持って来たか。

今後の焦点はこのバッグの行方と、二十五分の空白に絞られた。

10

事件当日大きなバッグを持って羽田駅を歩いていた人物の、目撃情報を寄せて貰う立て看板を掲げた。

早速、何人かの情報が寄せられた。それらを総合すると、駅の構内を大きなバッグを持って歩いていた人物は、十時前にそこを通り、今度は十時過ぎに違う男が同じようなバッグを持って反対方向に歩いていた。そして、その両方を目撃した人がいた。

「大きなバッグを持って、構内を歩いている人を見た時、旅行にでも行くのかなと思い羨ましがっていたのですが」

「どんなバッグでしたか？」

前川が聞いた。

「茶色の革製みたいでした」

「高そうなの？」

「ええ、高そうでした」

目撃者は目を細めた。

「それから？」

「五、六分した後ですかね。今度は同じバッグを持った人が引き返して行きました」

「違う人だったのですね」

「ええ。同じバッグを持った人がいるのだなと最初思いましたが、膨れ方も同じなので、きつとさっき持って行った人がその人に渡したのだなと思いました」

「丸つきり同じだったのですね？」

石倉が言った。

「そうです。そう見えました」

目撃者は断定した。

「その人物はどんな人でしたか？」

石倉が顔を突き出して聞いた。

「五十くらいのちよつと太った人でした」

「背は？」

「あまり高くなかったですね」

「百六十くらい？」

「そうですね。そのくらいだと思います」

「その他に何か特徴は？」

「紳士的な感じでした」

「顔は？」

「少々角張っていたような記憶があります」

「頭髪は？」

前川が矢継ぎ早に質問した。

「白髪交じりのような気がしましたが。そのところは良く覚えていません」

「そうですか。それからバッグは重そうでしたか？」

「いや、下にキャスターが着いていたみたいでしたから、そんなではなかったと思います」

この結果、矢沢良一は会社を出て、どちらかに寄ってバッグを持ち、羽田駅からどちらかへ持って行こうとした。そこへ犯人が来て矢沢良一を殺害し、そのバッグを持って姿をくらました。

バッグの中身にこの犯罪の糸口が隠されていると、石倉と前川は直感した。

11

バッグを持って駅構内を出た犯人の足取りを探すべく、石倉、前川の両刑事は再度聞き込みを開始した。

大きなバッグを持った人物ということで、意外に簡単かと思いきや、有力な情報は皆無に等しかった。

「犯人は車を用意しており、矢沢良一を殺害して車で逃走した」

前川が言った。

「矢沢でなくとも良かったんじゃないのか？」

石倉が言った。

「いや、犯人は矢沢があその時間にあそこをバッグを持って通る事を知っていたのだと思います。犯人と矢沢は何かの関係があるはずですよ」

そう前川が言うと、

「そう決めつけるのは危険すぎないか？」

宮部が口を出した。

「そうですが、犯人はだれでもいいのなら矢沢を殺した後、そんな目立つバッグをわざわざ持って行かないと思います」

「そうだな。バッグなどどうでもいいわけだな」

「でしょう。犯人はそのバッグが目当てだったのだと思います。そして警察には何の利害関係もないと見せかけておいて、通り魔がしたように装って殺した」

前川が自分の推理を喋った。

「なるほど」

宮部は腕組みをした。

「バッグの中身だな」

宮部が呟いた。

「旅行に行くわけでもなく、矢沢の仕事柄、そんな大きなバッグを持って歩く必要は全くない。会社を出て、ある所に行きそのバッグを貰い、どこかへ行く途中で殺された。そしてそのバッグが紛失している。五十くらいの小太りの男が持つて行った。その男は声紋鑑定的人物に似ている。犯人は我々に敵意を持つて挑戦して来たのではなく、最初から矢沢良一を殺害してバッグを奪う事が目的だったのです」

前川が興奮して喋った。

「矢沢はどこからそのバッグを持って来たのでしょうか？」

石倉が言った。

「そこだ。二十五分の間に行つて来れる場所だ」

前川が羽田駅周辺の地図を出し、片道十二、三分で行ける所、約一キロの所を羽田駅を中心にコンパスで円を書いた。そして、車で行ける範囲も囲った。

「この円の中からバッグを持って来てどこかへ行こうとした。まずはこの円の中を聞き込んでみよう。……さてよ」

宮部が腕組みをして目を閉じた。

「これだけの大きなバッグを持つて電車に乗り込む自体がおかしいな。どこかへ運ぶならタクシーを利用するのが普通だ。この円の中のどこかに隠しておいてバッグを運ぶとなると、何もわざわざ電車に乗らなくともタクシーを拾えばいいわけだ」

「と言う事は、矢沢はこのバッグを運ぶのではなく、この羽田駅で

だれかに渡すために持つて来た」

前川が言った。

「そうだ、そうだよ。どこかに持つて行くのではなく、ここへ持つて来たんだよ。それを犯人に奪われた。それともその犯人に渡すために持つて来たのかも知れん。そして何かトラブルがあり、矢沢は殺されてバッグを奪われた」

宮部は黒板を睨みながら言った。

「でもバッグを持つて行った矢沢と、そのバッグを持つて出口に向かった犯人との時間がなさすぎます」

石倉は考えが纏まらなかったが、口を出した。

「トラブルの時間だな。僅かな時間の間に犯行が行われているという事は、初めから犯人は矢沢を殺害してバッグを奪う事を計画していた。これならつじつまが合うだろう」

宮部は黒板に貼つてある、駅の見取り図のトイレから、駅の出口に赤いチョークを引いた。

「そして、犯人は用意していた車で逃走した」

「矢沢は、仕事の他に何かやっていたんですかね？」

石倉が怪訝な顔をして聞いて来た。

「運び屋か……」

宮部がそう言つて、矢沢の奥さんに電話した。

1
2

「ご主人は今の会社以外に何かアルバイトみたいな事はやっていなかったですか？」

「いいえ、そのような事はしてないです」

「奥さんに知らないお金を持つていたとか、そういう事はなかったですか？」

「ええ、そのような事はありませんでした」

「遅く帰つて来た事は？」

「営業の仕事ですから、それはしよっちゅうありました。でも特別変わった事はありませんでした」

矢沢の奥さんは、丁寧な言葉で喋った。

「休みの日は？」

「休みの日は家庭サービスをしてきてました」

「そうですか。つかぬ事を聞きますが、何か荷物を持って帰って来た事はありませんでしたか？」

宮部はバッグの事に触れた。

「別になかったです」

矢沢は一切の事を、家庭に持ち込んでいなかった。

「話を戻そう」

宮部は受話器を置き、黒板を見た。

「矢沢が、仮に何かの運び屋をやっていて、羽田駅で犯人に渡した。そこでだ、何で羽田駅なんだ？ 他でもいいんじゃないか？」

宮部が黒板の駅を叩いた。

「それは、この駅の近くに秘密のアジトがあつて、そこでは具合が悪い所だと思っています」

前川が言った。

「例えば？」

「アジトの回りにその犯人は入れない……。いや、犯人にはそのアジトが分かっている」

「危険な推測だな」

「そうですね」

前川が頭を掻いた。

「警部、私の思うにはそうではなくて」

石倉が口をきった。

「矢沢はその荷物を持って飛んずらしようと思った。羽田駅から空港に行き、飛行機で逃げようとした。しかし犯人が追って来たのでトイレに隠れようとしたが、見つかり殺害された」

「ふんふん」

宮部は黒板を睨みながら頷いている。

「犯人は、警部に羽田で殺人があると言って来た。それは矢沢が荷物を持ってどこかへ飛んずらするのを知っていて、それなら飛行機に違いないと思い、羽田で殺すとわざと言って来た。しかし、羽田と言えば空港だと思うのは当然で、犯人も警部にそう思わせておいて、実は羽田駅の方で殺害をする。これで通り魔的な扱いで警察は見てくるだろうと考えた。矢沢良一は、犯人とは丸つきり利害関係がなく思われ、捜査の芽を刈り取るに成功した」

石倉の推理は的を得ていた。

「もし、私が空港ではなく、羽田駅の方と思っていたら」

宮部が質問した。

「その時は駅では殺さず、空港で殺したでしょうね」

「両方とも特別警戒していたら？」

「それはないと読んでいたでしょう。そのために、一回目のサンシヤイン地下駐車場、二回目の大井競馬場と布石を打ったのです」

「三度目も嘘じゃないかと、両方の警戒をするとは思わない……か」

宮部が舌打ちした。

「中身は何だったんでしょうね」

前川がバッグの中身に興味を持った。

「抱えられないほどの荷物だから、麻薬とは違うな。まさか、札束でもないし……」

宮部は犯人像がだんだんと見えて来た。

「石倉君の説を考えて、この円の歩いて行ける距離を徹底的に洗ってみよう」

宮部が往復二十五分圏内の円に指をさした。

宮部は、目撃者を再度呼んだ。

「もう一度聞きますが、あの時大きなバッグは中々トイレの中に入らないとおっしゃいましたね」

「ええ、かなり膨れていましたから最初は無理でした。それでその人は一旦外に出て、外から中へ押してようやく入ったのです」

「その時バッグの中は何だと思いましたか？」

「さあ？」

目撃者は、腕組みして思案顔した。

「押して入れる時、バッグの中身は固そうでしたか？ それとも押して潰れましたか？」

「そういえば、シャリシャリと音がして、何か潰れたようでした」

「シャリシャリと音がしたんですね。それは何かに例えるとどんな音でしたか？」

「うーん……」

「紙が擦れる音とか」

「いや」

目撃者は、首を振った。

「絹擦れの音とかは？」

「ちよつと似てますが、違います。でもシャリシャリクシャクシャという感じの音ですから、衣類の音かも。でも、もう少しはつきりした音でした」

「クシャクシャと」

「ええ」

「衣類をビニールに入れて擦った感じ？」

「そう、そうです。シャツなどをビニールに入れて、それを擦り合わせた音です。ええ、確かにそんな感じの音でした」

目撃者は、少しずつ思い出して来た。

「バッグにかなりの数を入れてパンパンに膨らませ、ビニール袋同士が押されて擦れた」

宮部は手振りを交えて言った。

「そうです。それに間違いないと思います。Ｔシャツとかがビニ―

ル袋に入っていますよね。あれを何枚も重ねて擦れた音です」

「Ｔシャツか」

宮部は頭が混乱した。Ｔシャツじゃないとしても、衣類をいっぱい詰め込んだバッグを命と引き換えにするかな。それともバッグの底には札束か麻薬が入っていたのかも知れない。

そこへ石倉から連絡が入った。

「羽田駅から十分くらいの所に縫製工場がありまして、よくそこから大きなバッグを抱えた人が出て来るというので、今その工場を張っています」

「それは繋がりがあるな」

宮部は目撃者の話を石倉にした。そして、宮部もその工場に飛んだ。

「どんな感じだ」

工場を見ながら宮部が聞いた。

小さな工場で、外から見ると民家のようにも見える。

「たまにトラックが来て品物を持って行くらしいのですが、月に一、二度、大きなバッグを持った人が出て来て、駅の方に向かう人を見た人が何人かいます」

「よし、署に帰って令状を貰って来るから、君たちは付近を当たってくれ」

宮部はその工場を家宅搜索すれば、必ず何かが出て来ると確信した。

付近の聞き込みの結果、ごく普通の縫製工場だと言う。主に若い人向けのＴシャツを作っていて、週に一、二度トラックが来て品物を持って行くらしい。怪しい人物は見当たらず、その大きなバッグを持って出て行く人は、トラックでは少なすぎるので手で持つて行くのではないかと言われた。矢沢の顔写真には見覚えはないと

の事だった。

「他にも矢沢みたいな人がいるのですかね」

石倉が工場を見ながら言った。

「そうかも知れん」

宮部は、増田、木下、加賀、大川の四名を加え、総勢七名で工場に入った。

宮部は令状をかざし、四、五人ほどの従業員の手を止め、家宅捜索を行おうとした時、主らしい人物が宮部のところに来た。

「どういう事ですか？」

「あなたは？」

「私はここの代表だが」

六十過ぎの小柄な人物が、眉間に皺を寄せ、険しい顔で宮部を睨んだ。

「縫製の仕事以外に、何やら秘密めいた事をしていると疑惑がありました」

宮部が静かに言った。

「何を言つとる。わしは三十年もこの仕事をしとるが、警察に厄介になる事など一度もしとらん」

主が宮部に噛み付いた。

「ではお聞かせ願いたいのですが。月に一、二度、大きなバッグを抱えて出て行く人がいますね？」

「ああ、いるけど。それが何か？」

「先日、羽田駅で人殺しがありまして、殺された人物がそのバッグを持っていたのですが、それはどういう事ですか？」

「そんなの知らん。何かの間違いじゃないのかね」

「あなたのところで大きなバッグを持って出掛ける人は？」

「交替で行くからだれとは決まっていない」

「では、今月の四日に持って行った人は？」

宮部が突っ込んだ。

「ちよっと待ってください」

主は奥の事務室に入り、何やら帳簿を持って来た。

「今月の四日はだれも行っていない」

「えっ！」

宮部は帳簿を見せて貰い、四日の欄を見た。納入書と書いてある帳簿の、そこは空白になっていた。

おかしい？ 宮部は混乱した。

「じゃ四日の日に大きなバッグを持って出掛けたのは？」

「そんなの知らん」

主が平然と答えた。

「では、矢沢良一という人はご存じですか？」

「矢沢など聞いた事もない」

丸つきり誤算だった。

宮部は仕事の内容を一通り聞いて、縫製工場を後にした。

15

宮部は署に戻り、緊急会議を開いた。

「これはどういう事だ」

宮部は、矢沢と縫製工場と繋がりと信じていたが、違っていた。

「工場の主は四日の日は行かせてないと言い、帳簿にもそれは載っていないかった。しかし、目撃者によれば、確かにあの工場が使っているバッグに違いないのだが。少なくとも主は何も知らないという事か」

「でも、あの工場から矢沢が大きなバッグを持って出て来た事は確かだと思います」

石倉が自分への納得のつもりで言った。

「かも知れん。主には内緒で……」

そこへ所轄の矢口巡査から連絡があった。

「そうか、ありがとう」

宮部が矢口に礼を言った。

「所轄に洗って貰った結果、あの縫製工場の主に息子が一人居る。名前は市川俊一。放蕩息子で、覚醒剤の常習者で何度も刑務所に入り、半年前に出所したらしい」

「と、なると」

「そうだ。その市川俊一が矢沢をそそのかしたと見られる。市川俊一がバッグの中に覚醒剤を忍び込ませ、それを矢沢が運ぶ。親が縫製工場をやっているのをいい事に、その荷物の中に入れる事を考えた。そして、荷物がトラックではなく、人が運んで持つて行く時に目を付け、それを利用した」

宮部は、自分なりのかなり確率の高い推理をした。

「市川俊一はあそこに居るんですかね？」

「ああ、居ると思う。今日行った時にも何食わぬ顔をして働いていたかも知れん。親は、息子がこんなだから、あんな威勢のいい事を言つて見本を見せたかったに違いない」

「気の毒に」

前川は主の顔を浮かべた。

「そこでだ。市川俊一も単なる運び屋か、中継所だけかも知れん。当然どこからの組織から、市川に指示が出ているものと思われる。そこで、石倉君は縫製工場を増田君と一緒に見張ってくれ。前川君は木下君と一緒に、市川俊一と矢沢良一との繋がりを調べてくれ。必ずどこかで繋がるはずだ。繋がったら一気に行こう」

16

宮部は市川俊一を洗った。以前に捕まった時の状況及び過去の繋がりを詳しく調べた。必ずどこかで犯人との繋がりがあはずだ。それとも市川が犯人かも知れない。

なかなか市川の全容が見えて来なかったが、前川が意外な事実を掴んで来た。

「市川と矢沢は同じK大で、同級生です。市川は二年で中退しますが、矢沢とはその二年間同じ教室で学んでいます」

「やはりな」

宮部がニヤリとした。

「よし、一気にやろう」

宮部は前川を伴って市川縫製に向かった。張り込み中の石倉を裏口に回し、宮部と前川が工場の中に入った。

「何だ、また来たのか」

主が不服な顔をして、宮部を見た。

「市川俊一さんは居ますか？」

宮部は主の顔を見つめ、静かに言った。

「俊一は居ないが……」

主は言いながら、チラッと後ろを向いた。

その時、ダダダッと一人の男が裏口へ走った。

宮部と前川は素早くその男を追った。その男が裏口の戸に手を掛けた瞬間、前川がタツクルした。

ズドドドーツ。二人はもつれて床に倒れ込んだ。そこへ石倉が来て、その男をねじ伏せた。

「市川俊一だな。矢沢良一殺しの重要参考人として署に同行する」
宮部がそう言うと、市川は観念したように頭をコクンと垂れた。

17

「矢沢良一を殺したのはお前だな？」

取り調べ室で、宮部が静かに言った。

「違う！」

市川俊一が否定した。

「じゃ、なぜ逃げたんだ」

「別に」

市川はふてぶてしい態度をとっている。

「何かあるから逃げたんだろが！」

石倉が机を叩いた。

「警察は嫌いだから」

「なに！」

石倉が市川の胸倉を掴んだ。

「まあ待て」

宮部が止めた。

「半年前に出所して、あそこにずっと働いていたのかね？」

宮部が聞いた。

「ああ」

「矢沢と連絡を取りながら？」

「そんな奴は知らん」

「とぼけるな！」

今度は宮部が机を叩いた。

「お前と矢沢は大学で一緒だったそうじゃないか」

「それだけだ」

「それだけ？」

宮部が市川を睨んだ。市川は口を閉ざし、素知らぬ顔をしている。
「黙っていても同じだ。俺の目は節穴じゃない。お前の親父さんの顔を見ていたら、不憫な奴ほど可愛いつて顔に書いてあったよ。それとは反対に、矢沢の母親は犯人に対する憎しみの顔がありありと出ている。この二人の親の対照的な顔は何だと、自分に言い聞かせてみた。子を思う親の気持だけではなく、その子が社会に出て、どれだけ立派に育っているか、親にとっては死ぬまで心配な事なんだ。お前は出所してから、まっとうに仕事をしている振りを親父さんに見せて来たが、親父さんはお前を見抜いていた。でも、振りだけでもその気持だけで有り難いと思っていた。そんな気持で満足していた親父さんは、それ以上を望もうとは思わなかった。なぜなら、反動が怖かったのだらう。可哀想に……」

宮部は言い終わると、市川の肩をポンと叩いた。市川は下を向いたまま、じつとしている。そして、一粒の涙が机の上にこぼれた。

「殺したのは俺じゃない」

市川がボソリと言った。

「じゃだれなんだ」

「大野だ」

「それは？」

「ムシヨで知り合っただけで、あまり深くは知らない」

市川はゆつくりと、息を吐き出すように白状した。

「矢沢とのきつかけは？」

「たまたま羽田駅で見かけて、金儲けに誘った。ただそれだけなんだ」

「詳しい事は言ってないんだな」

「ああ、矢沢は何も知らない。ただ荷物を運んで貰っただけだ」

「何回くらい運んだ？」

「矢沢は四、五回だと思う」

「他にも運ぶ人間がいるんだな」

「はい」

市川は素直に言った。

「なぜ矢沢を殺したんだ？」

「分からない」

「ほんとにか？」

「はい。俺には全く分からない。ちゃんとやっていたのに殺されるとは、気の毒な事をしたと思ってる」

「殺ったのは大野という訳だな」

「たぶんそうだと思う」

「大野の素性は？」

「さつきも言っただように、ムシヨで知り合っただけなので何者かまるで分からない」

市川が真剣な眼差しで宮部を見た。

「大野の特徴は？」

「五十くらいで背は低く、小太りだ」

宮部が頷いた。目撃者の言う人物と一致する。

「大野とは、どういうふうに関連するんだ？」

「一方的に電話が来る。明日の何時に持って来いと」

「それは覚醒剤だな」

「はい」

「家にあるのか？」

「あります。昔、仕入れたのがまだいっぱいある。私の部屋を探して下さい」

宮部が前川と木下を行かせた。

「そして、大野とはどこで待ち合わせるんだ？」

「羽田駅のトイレです」

「大きなバッグの中に、Ｔシャツと一緒に入っているんだな」

「いや、Ｔシャツ自体が覚醒剤です」

「何！」

宮部はびっくりした。

「それはどういう意味だ」

「Ｔシャツに、覚醒剤を溶かした液を染み込ませている」

「じゃ、親父さんも知っているのか？」

「いや、知らないと思う」

「じゃ、矢沢はそれを知って殺されたのか？」

「そうかも知れない。一回運んでかなりの金を渡したので何か感づいたのかも知れない。大野に渡す時、それらしい事を言って殺されたんだと思う」

市川は申し訳ない顔をして、宮部に泣き着いた。

「矢沢を殺したのは大野に違いない。刑事さん、大野を捕まえてくれ」

市川が泣きじゃくった。

大野、おそらく偽名に違いない。市川が警察に捕まった事で、大

野が動き出すかも知れない。宮部は大野の所在を探った。

18

大野。本名、古田義蔵と分かった。やはり覚醒剤での服役であった。三度の服役は全て同じ罪状である。

古田は、市川が出所した二ヶ月後に出所し、姿をくらましている。年齢は五十二歳。組織に属さず、常に一匹狼で世の中を渡っている。古田義蔵を全国指名手配をし、市川の部屋にあった覚醒剤の鑑定を急いだ。

市川俊一は、親に多大の迷惑を掛けた事を謝り、親の愛というものを深く心に刻み、大いに反省している。

この事を、市川の親父さんが聞き、宮部警部に涙を流した。

やがて、古田義蔵は名古屋で捕まり、矢沢良一殺しを全面自供した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9312i/>

挑戦

2010年10月8日15時07分発行